

# 難民の早急な救済必要

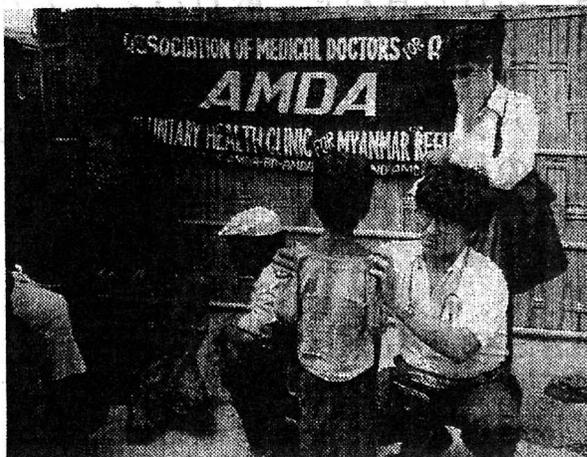
「バングラから帰国のAMD A医師団訴え」

## 赤痢などまん延

### 器材や薬品不足も深刻

軍事政権の圧政から逃れたミャンマー難民を医療面から救済するため、バングラデシユの難民キャンプで医療活動に当たっていたアジア医師連絡協議会（AMD A）の菅波茂代表、本部・岡山市植津、菅波内科医院内の第一次医師団がこのほど、帰国。同医師団は「難民の衛生環境は想像していた以上に悪い。早急な救済が必要」と実情を訴えている。

菅波内科医院の津曲兼司（メンバー）四人は十日から二十三日までバングラデシユに



滞り、中西部の都市・コックスバザールを拠点に、南東部のラム、ウキア、テクナフの三地区に点在する千二のミャンマー難民キャンプを巡回した。AMD Aと一緒に各キャンプの衛生環境、疾病状況などを調査するとともに、臨時診療所を設け難民の診療などを行った。

同医師団によると、各キャンプでは幼い子供を抱えた母親が「この子を診てほしい」と医師団を取り囲んだという。病気は赤痢、マ

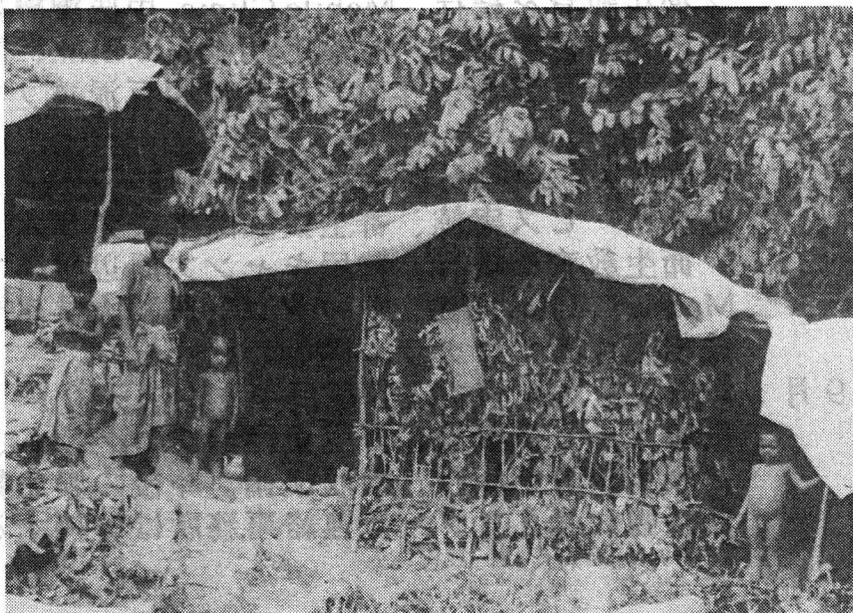
バングラデシユで医療活動に当たる津曲医師（右）ら

ラリアなどがまん延。診療所を訪れる人の約四割が寄生虫などで下痢症状を訴えていたという。また、治療のための器材や薬品の不足も深刻だった。こうした現状を踏まえ、AMD Aは今後、九月末ま

で、医師団を三回に分けて派遣。十二歳未満の子供を中心に、衛生教育や寄生虫駆除を行う。またコレラなど伝染病が発生した場合、国連機関などと協力し、緊急医療チームとして活動する。

津曲副院長は「難民は日増しに増えており、子供の健康状態はかなり悪化している。これから雨期に入り衛生環境の悪化がさらに心配される」と話している。

同医師団は三十日、菅波内科医院で今回の活動報告会を開く。参加の申し込み合わせはAMD A本部（0862207676）。



10万人弱の難民は、今も灌木と木の葉で作った小屋に住んでいる。これから雨期に耐えられるのだろうか。